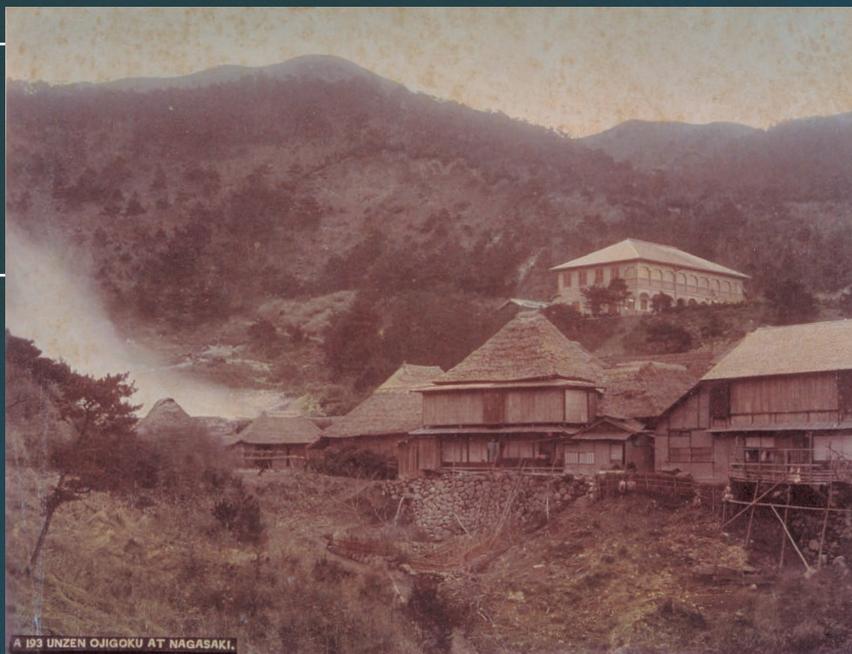


雲仙温泉 下田ホテル

The Shimoda Hotel

【古写真DATA】 長崎大学附属図書館蔵

- ◎写真名称：雲仙大地獄
- ◎英語名称：The Unzen Big Hell
- ◎目録番号：3808
- ◎撮影者：撮影者未詳
- ◎アルバム名：上野彦馬
- ◎撮影地域：長崎
- ◎年代：明治中期
- ◎色彩：カラー
- ◎形状：273x213
- ◎整理番号：73-15-0



古写真に見る

近代ホテルの黎明期

1

工学部教授

岡林 隆敏

Okabayashi Takatoshi

安政6年(1859)、日本が開港すると、新しいビジネスチャンスを求めて多くの外国人が居留地に殺到したが、宿泊施設が問題になった。このために、外国人居留地に洋式ホテルが建設された。さらに、明治初期になると、東京、大阪などの都市にホテルが造られた。明治10年頃以降、外国人の国内の移動の拡大に伴い、高温多湿の日本の夏を避けるために、高原と温泉場に、リゾートホテルが建設された。鉄道・水道・道路など社会基盤の近代化が外部環境の近代化装置だとすれば、ホテルの建物、室内調度品、食器、料理や作法など、近代的なホテルは、日本人の生活すなわち、内部環境を近代化する最先端の装置であった。

長崎大学附属図書館「幕末明治期日本古写真画像データベース」を「ホテル」で検索すると183件の写真がリストアップされる。この中に、幕末から明治30年代までのホテルが含まれている。平成20年度は、この中から4箇所「ホテルの写真」を紹介する。第1回目は、表題にあるように「雲仙温泉下田ホテル」である。長崎市には「ベルビューホテル」「長崎ホテル」など有名なホテルがあり、これらもデータベースで見ることができる。

長崎では、明治10年以降、西南戦争の頃から、宣教師、領事、遠くは熊本、鹿児島地方に在留する宣教師が続々と夏を雲仙で過ごすようになってきた。雲仙登山や温泉浴の外国人の数が増加し、従来の旅館も建物はペンキで塗り、障子は硝子戸と代わり、室内の家具も洋式にして、次第に外国人に対する対応ができるようになってきた。島原の下田源八郎は、雲仙公園小地獄温泉浴場の高台を均し、明治16年雲仙温泉で最初の外国人向けの「下田ホテル」を建設した。写真が建設当時の下田ホテルである。「下田ホテルの装飾せられた談話室、食堂、大小の客室、十数の内湯の浴槽等の洋式に設備能く整ひ、雲仙に於いて初めて調理せられた食卓が朝夕飾られるようになり、長滞在には至極好都合となった」(『雲仙と島原半島』/大正15年刊)とされている。残念ながら、「下田ホテル」は明治39年、火災で全焼して再建されることはなかった。明治中期以降、雲仙温泉には次々外国人向けのホテルが建設された。

明治後期から昭和初期にかけて大型客船の時代を迎えると、マニラ、ハノイ、香港、上海などの東南アジアや中国南部の欧米駐在員にとって、雲仙温泉は夏場に長期滞在する絶好の避暑地であり、温泉リゾートとしての一大楽園となった。

【幕末明治期日本古写真画像データベース】

<http://oldphoto.lib.nagasaki-u.ac.jp>